

十月三十一日

十月も終わりだ。

十一月一日

昨年亡くなつたらしき山本夏彦さんから二冊本が送られてきた。文芸春秋「男女の仲」新潮社「ひとことと言つ」読みふけている内に一昨日に続き又も昼過になつてしまつ。「ひとことと言つ」は読む内に山本さんが目の前に居るような気持ちになつてしまつような文体の連続で舌を巻いた。本を読むのは死んだ人と話をする事だ、と山本さんは言うが、どうやら翁はまだ、市川あたりに空気の如くにして暮らしているのではなからうかと確信する。こんな文章は今を生きている人間にしか書けない。十四時大学。十五時石山研の外国人留学生の為の秋の懇親会。アベル夫妻と十一ヶ月の息子、デービット等と食事。私は十七時にサヨナラする。やりたい事が山ほどあるのが、俗人の私と、どうやら市井の隠であつた山本夏彦さんの天と地ほどの違いだな。しかし俺は不勉強だ。

鈴木博之「都市のかなしみ」と山本夏彦の「ひとことと言つ」を読み比べてみたくなって、敢えてその暴挙に打つて出てみた。新撰組愛好癖を持つ元旗本ルーツ、四百年の奉公人の伝統を持つ鈴木はどうやら、幕末の先祖の一人、加藤大五郎に何某かの思い入れがある。加藤清正が好きで加藤姓に養子にいったというこの

先祖は上野の彰義隊の一員であつたが生き延びてキリスト教徒として死んでいる。東大教授としての鈴木は律儀さの数々を思い浮かべて、私は深夜一人笑つた。そう言えばネラン神父という東京カテドラルの大神父が鈴木木の知り合いにいたのも思い出した。彼のイギリス好みのルーツは大五郎さんなのだ。山本夏彦の若年は親父の遺産の金利生活者であつたらしい。しかし鈴木の家とは全く異なる家風で、その後真砂子書店を開設したり、結局、工作社の経営を長くする等、山本さんは商売、事業の道を外れなかつた。武林無想庵とのフランス行などもあり、青年期は多分桁外れのアーキー振りを間近に視たのが、その考え方の基軸になつたに違いない。商売とはもともとアーキーな性格の中にある。かく言うそれぞれの動かし難い自身の骨格を、鈴木・山本兩人共に良く解つていたと私は思う。それ故、鈴木は山本夏彦を敬してはいたが、必要以上に距離を置いて眺めていた。山本翁も又、鈴木之才を認める事、大であつたが、やはり見えるか見えぬ位の丈の垣根越しに眺めていたような気がする。そりやそうだろう新撰組とアーキストじゃあ、仇同士なんだから。

誠に我ながら馬鹿馬鹿しい事を書いているが、実はそんなに意味の無い事でもない。何日か前に読んだ鈴木の本と、今日読んでいる山本夏彦の本の双方の中、ところどころに私は通じる何かを嗅ぎとつたのだ。それは何だろうか。単純に通じてはいない。通奏低音の違いは歴然としているように思う。が、処々に何か同じ顔をむき出しになつていられるのも確かだ。友人同士の中に同じ何かを視ようとする極めて私的な感情に基づいた考えであるのは解り切つてはいるのだが、この感じ、今日初めて判明した感じは正しい。誰が何と言おうと正しい。山本夏彦は日本文化の今の無残さを言い続けてあく事が無かつた。鈴木博之はそれを歴史家として

かなしみと表現し始めているが山本さん程に酷薄ではない。まだ何かと再構築への意志を持ち続けようとする。それは八十代の人間と五十代の人間の違いだと簡単に片付ける訳にはいかない。学者と文士の違いとも言えない。拠って立つところは似ても似つかぬのだが、しかしところどころに同じ顔が出る。面白い。

十一月二日 日曜日

工作社の「室内」次の連載のスタイルを考えなくてはならない。「目ざわりデザイン」の連載のタイトルは山本夏彦さんが考えてくれたもので大変気に入っていたのだが、どうやら憶測するにあまり読者には喜ばれていなかったのだろう。それに本当に眼ざわりだと思っているモノをデザインを介して続々と書くのには大変なエネルギーがいる。

十二時世田谷村佐藤論来村。佐藤健の一人息子である。電通に居る男。私のフィンランドのパビリオン計画を一方的に論に述べた。私が言ったのは、フィンランドに常設の日本パビリオンを建設するの意味なんだが、要するに、お前のオヤジとの附合いをそういう形でささやかに歴史に残しておきたいという極めて、ワガママな事である。この世代、つまり二代目がこういう暴論を受け入れるとも思わないが、とり敢えず言っておいた。佐藤健の息子が関心を示そうが、示すまいが、こちらは、動くのは決めているのだから、これは一種の仁義をきるの類なのである。しかし、オックスフォード出身の二代目佐藤健は仲々にしっかりしていて、動じず、仲々良いのであった。

世田谷村で一時間程話して、オヤジ、ゆかりの宗柳にゆく。飲んで新ソバを食べ、十五時半迄。時間を重ねて得られるものが文化的質なのだろうが、我々は、残念ながら0ゼロ近くから再出発しな

くてはならぬ。戦後五十年はその積み重ねは小さかった。これからは少しずつではあるが、積み重ねていかななくてはいけないだろう。自分の生きている時代に何かを視ようとしてはいけない。十六時世田谷村に戻る、昼の酒はきくのである、今日はコレで沈没かもしれぬ。それでもゴシック・リヴァイヴァル読み続ける。ゴシックという様式が現代にこういう形で継承されているのかと思わせる部分が随所にある。

十一月三日

七時前新聞を読み、再び眠る。九時前起床。昨日は佐藤論と飲めて良かったな。十時烏山駅中里人と待ち合わせ。取材で秩父へ。練馬より関越道、十二時前ソバを喰べ十二時過秩父市太田のページ・ワン工房へ。熊田暁さん、二七才に会う。熊田さんが友人二人と共に作った、モービル・ハウスを見て、色々話をうかがう。一・五トンのトヨ・エースの台に自分の手で二階建のモービル・ハウスを作った。二階はエア・シリンドラーのポンプで動き、組み上がるようになっていて。大昔学生の頃に考えたようなモノを熊田君は実際に作り上げていた。二年と二ヶ月かかったそうだ。それで一年の日本一周の旅に出た。もともと屋久島に行きたいと考えて、それでモービル・ハウスをセルフビルドする事を思い付いたらしい。我家、世田谷村のアルミ部分よりも余程素晴らしい精度であった。ドアのオートロックのディテールなど電気部品も組み込まれ、脱帽である。車の解体屋から部品の一部は入手したと言う。解体屋と秋葉原は現代日本の市場の聖地である。この熊田君のモービル・ハウスが面白いのは電気製品が細部に組み込まれ、電気住宅の感じを獲得している事だろう。彼は作り上げて後の一年間の旅行中、エネルギー（電気、ガス、水）について

敏感になったと言っていた。車中は十二Vと百Vの二系列の電気回路になっていて、とても百Vの電気は勿体なくて使えなかったと言う。実感、実体験からのエコロジー感覚である。観念的な学生に見せてやりたい位だ。しかし、このエコ・モービル、ハウスの真骨頂は何よりも二階が一階から引き出せること、空間がモバイルする事で住まいになる事である。実感として、こういう動きをする空間を私は初めて見た。何時間もかけて見に来たかいがあった。

十五時半過取材を終え東京へ。熊田君、工房のスタッフ共、若く、淡々としていて印象深かった。しかし、二十一才でこれだけのことを成し遂げてしまうと、これからが辛いのだろう。帰りの車の中で中里和人と「セルフ・ビルド」の取材のスケジュール、物件等を相談する。中里和人の写真は本能的に懐古するので、それが魅力的なのだが、アト残り三回の取材対象は可能な限りイマツポイモノに集中してゆく事を確認する。イマツポイと言うのは要するにイリユージョン、メディア寄りのセルフ・ビルドだろう。恐竜、町の模型、オマケのオモチャ、大イベントの仕掛け、舞台装置などのアイデアが出る。セルフビルドの連載は単行本にするので、明日に開いた感じで、幕を閉じたい。十九時過世田谷村に戻る。

中里和人写真集「逢魔が時」を手渡される。キリコの街に続く最新刊である。中里は「小屋の肖像」でいわゆる小屋ブームに火を付けた写真家であるが、その写真について考えてみる。写真家はその言葉によってその作品に対する評価を左右させる事は出来ない。しかし、何を撮るのかの意志の枠が写真家の価値を決めてしまうのも事実だ。画家と比較すればそのテクニク等の比重は極めて軽い。写真家は何を視ているか、そして、それを撮ろうと

するか否かで、価値の大半が決まるのだ。石山研の仕事が出る筈のTV・スーパーテレビ見そこなう。